

巻頭言

機器分析評価センター
センター長 栗原 靖之

この一年は単なる「激動の一年」という言葉で括ることができない一年でした。今こうやって一年をまとめて振り返る巻頭言を書くほどに、頭の中で整理できずにいます。目に見えない微小なウイルスが引き起こす分断やエゴ、セクショナリズムといった災禍が私たちを取り巻くあらゆるものに猜疑心と不確かな恐怖心を抱かせ、世界を一変させています。しかし、こんな時期だからこそ、確かな真実は自分ができる最善を誠実に尽くすことと信じています。

今年一年、センター教職員の方たちには研究活動の再開に向け、施設の安全な利用のための工夫や機器の万全な維持管理業務などに最善を尽くしていただきました。すべてが手探りでしたが、厳しい状況の中で共用施設としての責務を果たすことができました。その大きな貢献に深くお礼申し上げます。また、安全を担保するために実施した取り決めを守りつつ、機器分析評価センターを利用して研究活動を進めてくださった学生や教員の皆さんに深くお礼申し上げます。おかげさまで大過なく一年を閉じられることができたのは皆さんが一人一人自分たちのできることに最善を尽くされたからです。

この一年ほど、人と人との直接のつながりが大切に思ったことはありません。できるだけ密を避けるようにとの言葉は、他の人との距離を遠ざけます。教育や研究はリモートでできることではありません。自動化できる部分とできない部分を切り分けて、密なコミュニケーションを取りながら教育研究を再開するために、一日も早く、微小なウイルスに打ち勝ちましょう。そのために、自分の立ち位置を明確にして、最善を尽くしましょう。

機器分析評価センターは次のステージに進まなければなりません。目に見えないものに打ち勝ち、今計画している様々な外部資金を導入する仕組みを発展させて、目に見える成果をあげることが必要です。皆さんの変わらぬご支援を心よりお願いいたします。